

Title	『ガラスの仮面』とアイドルをめぐる：美内すずえ氏に聞く
Sub Title	"Garasu no kamen" and "idols" : asking Miuchi Suzue
Author	小菅, 隼人(Kosuge, Hayato)
Publisher	慶應義塾大学アート・センター
Publication year	2015
Jtitle	Booklet Vol.23, (2015. ) ,p.104- 126
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Idole♥Heroine III
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000023-0104">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11893297-00000023-0104</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『ガラスの仮面』とアイドルをめぐる ——美内すずえ氏に聞く

(聞き手) 小菅 隼人

美内すずえ（みうちすずえ）氏は、1951年生まれ、大阪府出身の漫画家。代表作である『ガラスの仮面』は1976年から始まり、現在49巻まで白泉社から刊行され、累計5000万部を超える。この作品は、幻の名作『紅天女』の主役を目指す二人の女優の成長を中心軸として、シェイクスピアや現代古典作品と作者創作の演劇作品を題材にした役作りの苦心と人間関係のエピソードを繋ぎ、さらに恋愛や家族関係をめぐる葛藤を挟みながら展開していく。物語では、天才的な演劇センスを持つ北島マヤを主人公に、ライバルの姫川亜弓、師匠の月影千草、マヤの理解者であり恋愛相手である速水真澄ほか、青木麗、聖唐人、桜小路優、尾崎一蓮、乙部のりえ、姫川歌子、黒沼龍三、小林源造、鷹宮紫織など、多くの個性豊かなキャラクターが登場し、それぞれが熱狂的なファンを持つ。また、『ガラスの仮面』は、演劇、テレビアニメ、テレビドラマ、音楽劇など多くの二次創作を生み、さらに、作中劇「女海賊ピアンカ」がミュージカルに、「紅天女」が能役者・梅若玄祥師（人間国宝）により新作能として舞台化されるなど、今や、日本の少女マンガを代表する作品である。

はじめに

小菅：慶應義塾大学アート・センターでは、毎年テーマを決めて、芸術関連の研究論文やエッセイを小書籍にして刊行しています。今回は、「アイドル♡ヒロインを探せ」をテーマとして、私たちが古代から常に持ち続けていながら、今なお折に触れて、社会現象として爆発的に膨れ上がる「アイドル」という存在および現象について考えてみたいと思っています。先生の代表作である、『ガラスの仮面』のファンは、大変幅広く、年齢、性別を問いません。実際、慶應義塾教職員の中にも、当局公認ではありませんが、秘密結社のようにして「ガラカメラ部」という熱狂的ファンのグループが存在しています。カルタ会やったり、関連イベントがあると東京プリンスホテルに泊まったり、お互いをキャラクター名で呼び合ったりしています（笑）。さて、この小冊子の基本テーマなのですが、先生は、そもそも「アイドル」とはどのような存在とお考えでしょうか？

マンガの登場人物をアイドル視することは以前からしばしばありましたし、現在では、とりわけメディアの中で、「女性アイドル」の存在感は圧倒的で、驚くほど膨れ上がったAKB48および姉妹グループのメンバーは様々な媒体に溢れ、「総選挙」はファンではない人々にとってもいまや大イベントとして認知されています。そして、彼女たちはとても「マンガ的」のようにも見えます。また、地方自治体でさえ、「ご当地アイドル」で村おこししようと続々と企画を打ち出しています。

美内：ええ、そうですねえ、ゆるキャラもそうですね。

小菅：そうですね。そもそもアイドルというものの力の源泉はどこにあるのでしょうか？単なる人気歌手とか人気女優とか、そういうものを超えて、ある種カルト的な情熱をもっている個人的なアイコンのようにも見えますし、あるいはもっと集団的で文化的な現象のようにも思えます。一体アイドルたちの力は何に由来するのか、どこからやってきたのか、大衆の欲望から来たのか、エロ的な深淵から来たのか、文化的なものなのかといったことが私たちの基本的な問題意識です。先生の『ガラスの仮面』の中の人物というのは、あるファンにとっては、作品全体を超えて個々の人物として、もうほとんどアイドル化しているような面もあるように思えます。

美内：ちょっとありますね。

小菅：というわけですので、アイドルとかヒロインという言葉をまず広く捉えて頂いて、物語もですが、『ガラスの仮面』の登場人物について色々お話を伺いたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

### アイドルとの出会い

美内：こちらこそよろしく申し上げます。秘密結社「ガラカメ部」は嬉しいですね。東京プリンスの『真澄部屋』に泊まってくださったんですか（笑）。私は泊まられなかったんですよ。ありがたいことに予約がいっぱいで。アイドルは元々「偶像」っていう意味だったんですよ。それがなにか別の意味で人気者であったり、みんなの夢とか、魅力ある存在とかいう形で捉えられていて、偶像は偶像なんだろうけど、でも本来の意味とはだいぶ違ってきているのかなという印象はあります。特に若い子たちにとってのアイドルっていうのは興味の赴くままに変化していく気がします。たとえばロック歌手だったり、タレントさんだったり。今は初音ミクみたいにヴァーチャルアイドルが出てきて、ファンを熱狂させていますね。これもなんだかすごく面白い現象ですね。人間じゃなくてヴァーチャルのアイドル。これどこから来ているのかなあって考えたら、ふつと私の子供の頃を思い出したんですよ。その頃の私にとっては、当時流行っていた漫画の主人公がアイドルだったんです。今の方たちはあまりご存じないと

思うけど『鉄腕アトム』とか、『エイトマン』とかね。ヴァーチャルアイドルだったんですよね。エイトマンなんか本当に大好きで、学校の帰りに発売日に本屋へ飛んでいき夢中で立ち読みして、エイトマンの姿だけ何度も見てうっとりしていました。テレビでももちろんうっとり。そう思うと、漫画のキャラクターも充分アイドルになり得ますね。

小菅：先生は少年マンガから入られた方ですか？

美内：いえいえ、もう少年マンガとか少女マンガとか、全く関係なくて、面白いマンガなら何でも。当時はアメリカのマンガの海賊版も出回ってたり、もう面白いマンガなら何でも良かったんです。その中でスター的な要素をもった魅力的なキャラクターが、私にはアイドルでした。憧れの存在というか、姿を見ただけでときめくとかっていうのはエイトマンが最初ですね。アトムは、ロボットだし、少年だし、年も近いし、結構悩んだりとかするのでそこに親近感を感じて、ちょっとお友達感覚みたいな感じだったんですけどね。エイトマンが初恋の人っていっちゃあ初恋の人で、ヴァーチャルで。そういうのはすぐ卒業しますけどね（笑）。

小菅：そうですか。現実の人物ではいらっしやいませんでしたか。

美内：現実の人物ではあんまりなくてですね、やっぱりマンガに夢中になっていたせいでマンガの中のキャラクターがほぼ理想形だったんですよね。もちろん、「わあカッコいい」とかっていうのは映画の中の存在であったりテレビに出てくる人だったりあるんですけど、その瞬間で終わってしまうので、別に…何て言うんでしょうねえ、そんなに自分の中ではアイドルと感じたことはあんまりないですよええ。

小菅：エイトマンのどういうところに惹かれたんですか？

美内：もともと人間で、だけど、ロボットになっちゃってるじゃないですか。そのことで苦悩するところがカッコいい。人間だったらこんなことできるのに、とかね。恋人らしい女性もできるんだけど、自分はロボットだから近づいていけないとか、そういう姿勢っていうのが、だいふ大人になって『ガラスの仮面』を描いていても、速水真澄とちょっと通じるかなって。

小菅：ああ、そうか！

美内：…って思ってるところがあるんですけどね。

小菅：目から鱗が落ちたような思いがしました、速水真澄とエイトマンってい

うのがそういう風に繋がるのですか？

美内：あんなにカッコよくはないんですけどね（笑）エイトマンみたいに。

小菅：前に先生とお話しさせていただいた時、石ノ森章太郎先生のことに言及されてました。『サイボーグ009』もやっぱり先生の一つの原点でしょうか？

美内：あれはあれで、なんていうのかな、主人公一人が頑張るんじゃなくてチームワークで頑張る姿っていうのがすごい新鮮で、すごい面白かったです。

小菅：なるほど。

美内：もちろん009も憧れというか、とても興味あるキャラクターで大好きは大好きだったんですけど、やっぱりエイトマンほどのときめきはなかった（笑）、今思うと。

小菅：最初に仰っていたように、アイドルまさに「偶像」ということですので普通考えれば単数って言いますか、一人の人ですよ。しかし、AKBなんか代表されるように集団アイドルって言いますか、あの現象っていうのはやはり『サイボーグ009』みたいなチームとしてのアイドルっていうことなのでしょうか？

美内：それもあるかもわからないですが、あれはちょっと違うような気がしていて、その前にモーニング娘。がありましたよね。あれでつくくぶさんがどつと若い女の子を出して、その一括りの音楽をみんな楽しんでるんですけど、それでも必ずその中の一人誰かご最頂がいるんですよ。その人にとってはアイドルはやっぱり一人なんじゃないかなって思うんですよ。総選挙みてもそうですね。いつも集団でいるけど、自分にとってのベストワンはこの人！っていうのがどこかあって、例えばAKBのグループも全体として応援はしてるけど、その中でもこの子を応援してるっていうのがたぶん一番多いと思います。自分にとってのアイドルは、常にやっぱり一人の人じゃないのかなって私は思いますね。もちろん複数大好きっていう人もいっぱいいるとは思いますが。

小菅：宝塚なんかもそうですね、一人の人を決めて、追っかけをする。

美内：宝塚はまたアイドルになる方もアイドルとしての、なんていうんでしょうねえ、スターですかね、スターとしての姿勢を常に保ち続けて夢を壊さないように努力してますよね。だいぶ前なんですけど私の知り合いが、あるトップスターの方と関わっていて、その方が退団されてからその方のために一人芝居の台本を書いて、宝塚の大劇場じゃない方でそれをやったんですけど、やっぱ

り退団したとはいうものの、ズラッとですね、出ていく楽屋口にはその人のファンがたくさん並んでいて。その行列のなかを、彼女は、ゴージャスな毛皮を羽織って、颯爽とその中を歩いていって、お迎えの車に乗り込むんですよ。公演後に打ち上げやろうと言ってた店が劇場から歩いて5、6分のところなんですけど、ファンの人たちの前では姿が見えなくなるまで“スター”という夢を壊さないようにしているんです。すごいですね。

小菅：なるほど（笑）。

美内：「苦勞するんだねー」って話はしてたんですけどね。アイドルになるほうも、夢を壊さないように努力してるんですね。

小菅：そうですね。先生は多くの作品を出しておられますが、今日は『ガラスの仮面』を中心にお話を伺います。今先生に仰っていただいたように、物語の世界に入ってみれば北島マヤとか姫川亜弓っていうのは努力の人であり天才ですよ。そして、今先生が触れられたような他者の眼差しというよりもむしろ自分の信念とか価値観によって動いている。その意味では反アイドルと言いますか、アイドルとはちょっと遠い存在のように思えるのです。ただそうは言っても『ガラスの仮面』の読者にとってはそれぞれがファン層をもっています。私は紫織さんなんですが（笑）。

美内：ええーっ！

小菅：私は紫織さんが大好きです（笑）。

美内：すごい、珍しい、初めて聞きました。

小菅：紫織さんには何とか幸せになって欲しいなとも思っています。

美内：ええー、そうですね、きっと最後はなんとかなるんじゃないですかね、紫織さん、ちょっと正気に戻るし（笑）。そうですね、へえー……。

### 『ガラスの仮面』の誕生

小菅：紫織さんはちょっと特殊かもしれませんが、それぞれの人物、特に北島マヤ・姫川亜弓はアイドル的存在になっているように思えます。まずはいわゆる作者から見た登場人物たちについてお伺いしたいと思うんですが、どのように登場人物を造型していくものなのか。私は演劇学が専門ですが、演劇理論から言うと、劇人物はもちろん外面があって、内面があって、そして行動をするという3つの要素があると思います。そういう点から言えば、北島マヤ・姫川亜弓・月影千草・速水真澄・鷹宮紫織みたいな人物像を作っていく時はどうい

う風に造型していくものなのですか？

美内：そうですね、『ガラスの仮面』に関しては、最初に主人公ありきなんですよ。前にお話ししたことがあると思いますが、私10歳の時に『王将』の映画を観まして。伊藤大輔監督が北条秀司さんの原作で、同じ『王将』を3回くらい映画に撮ってるんですけどね、その2度目の映画化の時の作品で、主役の坂田三吉を三國連太郎さんがやっていました。その『王将』を観て、坂田三吉という天才的な将棋指しにすごい感動というかショックというか、それまで勸善懲惡の映画しか観てなかったし、当時としてもカラーもあったのに、なぜか白黒で。将棋を指すと天才的だけれども、それ以外は何もできない、馬鹿にされてる長屋のおっちゃん。それが将棋を指すと天才性を発揮するという、その姿を見ながら何でこんな人間がいるんだろうって映画観ながら、喉がカラカラになるくらい見入ってしまったんですよ。人間って何だろうって思う一番最初の映画でした。以来、ずーっと頭の中にあって、24歳の時に白泉社の『花とゆめ』で連載しようっていうことになった時に、そういう坂田三吉みたいな女の子を描きたいな、って思ったんです。それで演技は天才だけれど、そのほか以外は何もできない北島マヤを主人公に『ガラスの仮面』を始めたんです。見かけは平凡な女の子で、勉強もできないし、裕福でもない。背も小っちゃいし、お母さんからはいつも駄目な子と言われてる女の子で、そんな自分に劣等感を持っている。でも自分の中にきらめく何かを、宝を発見して生きていく設定にしたんです。他のマンガ家さんもそうだと思うんですけど、キャラクターを決める時って結構楽しくてですね、だいたいこんなアイデアにしようって絵を描いてくんですが、絵ができた段階でだいたい名前も決まったりするんです。月影千草なんかもそういう過去を抱えてるから、髪の毛左側の顔を隠し、常に喪服のような黒い格好をしているとか。ほかのキャラクターも色々考えて、星座は何座とかね(笑)、生年月日は？とか、好きなものは？とか、癖は？家族構成とかは？とか、いろいろ描いていって、それで作っていくんですけど、その作業って結構楽しいんですよ。北島マヤが最初に出来ていたので、亜弓は全く反対を描けばいいや、って。

小菅：なるほど。

美内：とにかく派手で美しく、目立っていて何でもできて優秀で、ってね。それはそれで楽しい作業なんです。最初の登場人物の絵を描いている段階で髪型を決めたり、服装をきめたり、そんなところからキャラクター作りに入っていくんですけど、その段階で性格も決まったりします。とにかく脇役もどんどん浮かんでくるんですよ。やりだすと。黒沼龍三なんかも実は奥さんに頭があがらないとか、色々です。髪の毛はこれでやるかーとかね、いつもちょっと頑固そうな眉毛にしようとか、そんな感じでキャラクター作りをしています。

小菅：北島マヤがいて姫川亜弓がいて、恐らく月影千草がいてというふうに創られていくわけですね。速水真澄についていうと、細かい点で恐縮ですが、実は「ガラカメ部」の一人の部員からぜひ聞いてくれと言われた質問がありました、それが、桜小路君がどうして発展しなかったのか、まさに速水真澄のいわばライバルですよ。

美内：ライバルですよ、そうですね、困りましたね。

小菅：そこはまだもうちょっと、これからでも。

美内：そうなんですけどね、桜小路君はマヤちゃんのどっちかっていうと前半のボーイフレンドみたいな感じでずーっと出てきていて、ちょっと本当はですね、『ロミオとジュリエット』のような立場にしたかったんですよ。

小菅：あ、そうなのですか。

美内：マヤちゃんは「つきかけ」にいて、彼は「オンディーヌ」にいて、ライバル劇団の『ロミオとジュリエット』みたいな感じにしたかったんですけど、描いてるうちにですね、マヤちゃんも色んな動きをするようになって、そうすると、そこに真島君が出てきたり色んな人が出てきて話が複雑になっていき、なんとなく悩める青年になっていったっていう感じになって…(笑)。だいぶたってから『狼少女ジェーン』の時登場するんですけど、このブランクが長くてですね、今度は読者の関心が速水真澄に移ってるので、速水真澄のファンからしてみると余計な奴が出てきたっていう感じになって、結構気の毒なんですよ、桜小路君の今の立場は。今はもうメールでファンレターが来るようになったんですけど、桜小路君が出てきてデートしたりすると、いきなりメールが「キモい」。

小菅：そうですね(笑)。

美内：どうしよう、というか(笑)。

小菅：面白いですね、その文脈から言うと、北島マヤのいわば演技上のライバルが姫川亜弓なのに、いわば恋のライバルって言いますか、そういう面として鷹宮紫織が出てきたのが少し遅かったような気がしますが。

美内：出方がですね。

小菅：出方が。もともと、たとえばですね、速水真澄と姫川亜弓が恋愛関係になるとかいう展開もあり得るのかなと思いつつ読んでいました。



美内：そういう意見の人も結構多かったですけどね。

小菅：それはやっぱり、まずは演技の、っていうことでしょうね。

美内：そうですね。

### 北島マヤと姫川亜弓

小菅：少し戻りますが、坂田三吉の話がとても面白いですね。たとえば、ウィリアム・テルがとても弓が上手いみたいに、ある一つのことについては非常に天才的、だけど他のことについては平凡というか平凡以下、やっぱりそういうものが一つのカリスマ性とか、アイドル性とか、そういうものに繋がっていくのでしょうか？

美内：『ガラスの仮面』の北島マヤはアイドルになるかっていうと、私はならないような気がしていて、むしろ姫川亜弓さんの方が、「亜弓さん」というのも変だけど（笑）、人気が高いんですよね、今や。特に大人の女性とか役者さんとかは、マヤよりは亜弓が好き、っていう人の方が多いという印象ですね。それもアイドルというよりも、人間としてとか、女性としてとかいう話であって、アイドルということではないと思います。

『ガラスの仮面』を引っ張っていつてるのは北島マヤの情熱以外何もないので、そういう意味では物語の「リード役」はしてるんですが、やっぱりアイドルって感じではないですね。なんでかっていうと『ガラスの仮面』の場合、読者は、主人公に自分を投影して読んでくれるので、主人公が体験することがそのまま読者の体験として感じられて、主人公が苦境を突破していくところに勇気や快感を覚えるんだらうなあと思っています。なので、自分で自分をアイドルにはしないでくださいね。アイドルってあくまで偶像で、自分以外の何かを好きになったりファンになったりするものなので。

小菅：ああ、そうか。

美内：マヤの見た人物たちの誰かを好きになるってことはあり得るかなあと思うんですけどね。

小菅：なるほど。

美内：とにかく、読んでくれる人が全部マヤに自分を投影して、マヤの目でもってマヤの身に起こるドラマを体験してもらいたい、というつもりで描いています。そのつもりで読んでくれるからワクワク度も多分あると思うんです。そこでマヤとして出会う速水真澄とか、マヤとして出会う格好いい亜弓とかにはファンが付くっていう、そんな感じがちょっとしてますね。

小菅：面白いですね、そうすると北島マヤっていうのは、もちろん彼女のパッションが物語を引っ張っているっていう意味では主役ですけども、主役であって主役でないっていうか主役であって語り手っていうか、そういう物語上の構成ですね。

美内：そうですね。マヤは読者の気持ちと一番近いところにいる存在であって、読者がマヤの目線で他の登場人物を、例えば月影千草のセリフを聞いたり、真澄の本当の気持ちを知ったり、それで真澄のファンが増えたり、亜弓の存在に励まされたりして亜弓のファンになったり。マヤ個人のファンっていうのはそんなには…。もちろん連載当初からしばらくは圧倒的にマヤのファンが多かったんですけど、今はマヤの周りのキャラクターに人気があります。ただマヤの行く末をハラハラしながら見守ってくれてる読者もいっぱいいるので、そういう意味ではね、やっぱり主人公は主人公なんだろうなと思いますけどね。

小菅：ああ、そうか。よく中心にいるのだけれどもドジで、っていう。『セーラームーン』の主人公なんかもそうですね。ただ北島マヤの優れているところというか、特徴は、やっぱり先生が今言っていたように演技をやらせると圧倒的な天才っていうところですかね。そこがきっと通常のいわゆるアイドルマンガ・ヒーローマンガとはちょっとやっぱり違うような気がします。

美内：なんですかねえ。マンガの中のアイドルはね、本当にたくさんいるんですけど、なんていうんでしょうね、時代が過ぎてしまうとアイドル像がまた変わってくるみたいなのもたくさんあるので。どうなんでしょうか。読者の方が主人公と一緒にあって、ドラマを体験してもらいたいというのが私の本当の望みなの。そうすると疑似体験できるわけですよね、その世界を。そうやって、もちろん客観視もしてるんだけど、マヤと同化して物語を体験してもらって、その上で元気になってくれるのが一番いい。一番嬉しいって思ってます。

小菅：いま伺ってそうだなと。そういえば北島マヤっていう人物は最初から最後までというか、一番初期の段階から現時点まで変わりませんけれども、例えば姫川亜弓なんかは明らかに変わりましたよね。最初はもう北島マヤの敵役でちょっと意地悪な美少女っていう感じでしたけど。それが北島マヤの、ある時には保護者になり、ある時には友人になる、ある時にはライバルになっています。

美内：そうですね、だから描いてて楽しいですね、亜弓さんはね。最初は典型的な少女マンガの敵役として登場させたんですけど、結構早い段階から「あれ、何でこの子はこんなこと言うんだろう」って思い始めて、最初に決めていた設定をもう一度見直そうと思ったんです。なぜ演劇をやるようになったのかとか、何でこんなに紅天女に固執してるのかとかね。母親に対するライバル心である

とか、親の七光りから抜け出たいとか、自分が一人の人間として認められたいとか、そういう風に考えていったら、子供時代のエピソードがいっぱいできたんですよ。ある日雑誌連載の最中に、『ガラスの仮面』の大筋とは関係ないんですけど、姫川亜弓の物語を描かせてください！って頼んで描かせてもらいました。単行本20巻くらいに出てると思いますが。そのお陰で、彼女の性格とか物の考え方とか自分のなかにすっと確立できたので、そこから正義感あふれた、孤高の人みたいなキャラクターがきっちりできあがっていった気がします。一番亜弓が身近に感じて一番理解でき合えるのがマヤで、マヤにとってもライバルだけど一番理解しあえるのが亜弓だろうと思うし、そこにライバルなんだけど物凄い大きな絆とかそういうものが実はある。その絆の大きさに比べると、亜弓にとっては、マヤにとっての真澄のような相手っていうのがいないんですよ、本当のことを言うと。なかなかふさわしい相手が出てこない。マヤも亜弓も、ライバル関係がなくなったら一番の親友になれるんじゃないかなって思ったりしてるんですけどね。

小菅：そうすると最初はある一つの坂田三吉的な物語、個人の内面みたいなものを掘り下げていくにしたがって変わっていったということですね。

美内：そうですね、深くなっていきましたね。それは真澄も同じで、紅天女に関わってる四人のキャラクター達を深く追及していくと、彼らの人生がどんどん出てきて。すべての主要人物が『紅天女』を中心に繋がって動いているんですね。って、他人事みたいですけど。

小菅：速水真澄のことが出たついでに「ガラカメ部」の方から質問が寄せられて、「速水英介さんと真澄さんのお母さんには愛があったのですか？」っていうことですが、どうなのでしょう（笑）。

美内：そうですね、もうちょっと待ってください、先で分かるから（笑）。

小菅：あっ、そうですか（笑）。

美内：はい。ラスト近くになって。

小菅：そういう形でキャラクターは変わっていくものだと思いますが、よく分かりました。私自身の人物配置の印象として、私は今50をちょっと過ぎていますが、子供時代はいわゆるスポ根マンガの『巨人の星』みたいなもので育った世代です。星飛雄馬っていう主人公がいて、永遠のライバルの花形満がいて、というような構図とちょっと似てるかなと思います。

美内：ものすごく似てます。私もずっと振り返って、原型はね、ふと気が付い

てやっぱり『王将』ですね。『王将』の坂田三吉がいて、貧しくて、将棋以外何も取り得がない。それが東京の大学出のエリート棋士・関根八段と戦うわけですよね。当時としては、大学を出てるっていうのはエリート中のエリートで、しかも二人の対決の場面がいい。関根八段は、背筋を伸ばしてキリッとしているわけです。いかにも礼儀正しくきちんとしている。対する相手の坂田三吉は礼儀も何もない風情で、劣等感から最初は縮こまった姿勢でいる。で、(将棋を)指すんですけど、どんどん関根が追い込まれていくっていうようなところがあったり、だけど関根が一番坂田三吉の才能を認めてるんですよ。周りが関根八段に「あんな奴相手にもならない」とか言って笑っても、関根は「そうじゃない、あいつの本当の凄さを知らんだだけだ」みたいなことをいう。自分で描きながらある日ふっとね「これやっぱり『王将』が原型かな」と。同じパターンとして『巨人の星』があり『あしたのジョー』があるのかなって気がします。

小菅：そうすると、先生ご自身もむしろご自分を北島マヤに重ね合わせてごらんになるようなところはありますか。

美内：ああー、ありますね。特に初期の頃は、あんなにカッコいいことはできませんけど、北島マヤの台詞なり考えなり気持ちなりはほとんど同化して描いてますね。マヤのセリフの「駄目でもともと」は私の好きな言葉なんです。難しいことでもやってみよう、駄目で元々なんだから、って。ちょっとカッコいいでしょう(笑)。何もやらないよりは少しでも可能性のある方に懸けたほうがいいって。「1%でも可能性あればそこに賭けたい、駄目で元々だから」って。

小菅：なるほどね、そうすると、先生にとってライバルはこうあってほしいというのが姫川亜弓で、恋人はこうあってほしいというのが速水真澄ですか。

美内：いや、そこまでは。速水真澄は描いててイライラしますからね(笑)。ごめんなさい、このことはあまり書かないで(笑)。最近、彼は優柔不断なので「お前が悪い」とか言いながら原稿描いてたりします(笑)。亜弓は対極にいて刺激し合い、共に高め合うライバルですね。

小菅：先生にとっての萩尾望都先生みたいな…。

美内：いえいえ、萩尾さんはまた別格(笑)。萩尾さんは漫画家というより芸術家のほうにより近いひとだと私は思っています。萩尾さんをライバルだと言える漫画家はいないんじゃないかと思います。私は彼女の作品のファンですし、その才能を尊敬しています。

小菅：前にもお話ししましたがけれども、慶應義塾大学理工学部の間人教育講座で萩尾先生に講義をお願いした時に、講義後の食事会で、次にどなたに講義を

お願いするのがいいでしょうかとお訊ねしました。その時萩尾先生が「美内さんがいいわよ」と言って下さいました。私は若い頃から『ガラスの仮面』を愛読していますので、とても嬉しかったです。

美内：ありがとうございます。

小菅：姫川亜弓に話が戻りますが、先生は、他のインタビューで、姫川亜弓が明らかに変わってきたのは『カーミラ』のあたりということを書いていましたね。

美内：そうですね、『カーミラ』のちょっと前から自分の中で段々彼女の性格は確立されてきてはいたんですけど。やっぱり『カーミラ』の時に彼女だったらこういうやり方をするなと思って、復讐する形でね。最大のライバルのために。表立ってマヤにはそんなこと言わないけど、「許せない！」っていう正義感みたいなところをちょっと描きたくて、それともう一つ『カーミラ』はどこかで劇中劇をやりたいと思ってたんですよ。マンガの中で使うと面白いな、ただ誰がやるんだ、マヤはおかしいと。どっかで亜弓がやるといいかもしれないなっていうのはかなりあったので、ちょうどここで描けるっていうのがありました。けど、いま青山劇場で『ガラスの仮面』の舞台をやってるんですけどね、演出家のG2さんが、長い話をもうものすごい詰めてるんですよ。それで亜弓が復讐する『カーミラ』をやって、乙部のりえを追い落としていくってシーンを丁寧にに入れてくれました。これ入れるとね、今まで舞台化した中で一番台本分厚いんですよ。これ何時間でやる気ですか、ここなくてもマヤが立ち直っていくシーンだけやれば、そんなに丁寧にやらなくてもいいんじゃないですかって言ったからG2さんが、姫川亜弓の、マヤが追い落とされたのを聞いて、「許せない」ってあのセリフをどうしても入れたい、って…。

小菅：わかる！

美内：ああ、そうかあと（笑）。その一言のセリフを入れたいためにこっだけ丁寧にやっているっていう、それぞれ思い入れがあるんだなって。

小菅：いや本当にいいエピソード、あれで一気に姫川亜弓ファンが増えたんじゃないかって！

美内：はい。ほんとに増えました。それ以来、雑誌の中のアンケートで亜弓が出てくるとガーッと人気上がるんですよ。視聴率が上がるみたいに。途中で「うわ、やばい」と。ちょっと出番を減らしてマヤの出番を増やさないと主人公が入れ替わっちゃう、ってちょっと焦りましたね。

小菅：あの場面でまたよかったのが、お父さんとの関係って言いますか、お父さんに頼みますよね、出演を。コネを使うという姫川亜弓の主義に反するところだけでも友達のためにというところが、姫川亜弓の内面が掘り下げられたっていうか、膨らんだところですよ。

美内：ありがとうございます、嬉しいですね。あそこは描いていて楽しかったですよね。

小菅：慶應義塾大学のゼミで、ご両親とも有名俳優で、自分も俳優になった学生がいました。本人自身は小学校・中学校時代に、お父さんもお母さんも一番忙しい時で、ずいぶん寂しい思いをしたらしいのです。それでも、後にお父さんの話をテレビの対談で見たことがあるのですが、子どものことは宝石のように思っていると言っていました。そういう意味では姫川亜弓もまた、複雑な思いはあっても、お母さんやお父さんと同業で、人間的には温かい関係にあります。北島マヤの場合、お母さんのエピソードは出てきますけれども、お父さんは出てきませんね。

美内：そうですね。お父さん早く亡くなったことになっているので出てこないんですけど。あそこに父親がいると話がなかなかややこしくなってしまうので、主人公が家出する時に母親と二人だけの方がシンプルで動きやすいのがもちろんあったんですけど、ある時にふとですね、自分を振り返ってみて、今まで描いたマンガの中で父親不在の話が多いことに気づいたんです。ホームドラマを描いた時も、お母さんが頑張っていて、お父さんが気が弱くて尻に敷かれているとかね、居るんだけどたいした役はしていないとか、そういう設定が多くてですね、これはどういうことか、とあるとき考えたんです。私にはちゃんとした父もいるし、子供の頃からずっと可愛がってもらってたんです。でも私、すごいお母ちゃん子だったんですよ。うちの父が忙しかったせいもあって、母の影響がすごく大きかった。だから作品にも母親という存在が強く出てくるんでしょうね。父親が出てきてもお母さんの尻に敷かれていたり。まるでうちの家庭そのものなだけでね（笑）。自分がどういう風な育ち方をしたとか、親の影響とか、色んな形で作品に反映されるものなんだなあって。『ガラスの仮面』も最初から父親がいない設定でやっているのに、時々ま言われるんですよ、「お父さんは何でいないの？」って。ちゃんと死んだって描いてあるんだけど…マンガの中に、って言うんだけどなあ。

小菅：ただ途中で速水英介とちょっと不思議な関係って言いますか、いいお爺ちゃんと孫娘みたいな。

美内：そうですね、あれどうなるんでしょうね（笑）。

小菅：どうなるんでしょう、読者としてはとても気になるところです。北島マヤにしても姫川亜弓にしても速水真澄にしても、いわゆる読者の影響っていうのは人物造型にやっぱり強い影響がありますか？人物造型として、例えば姫川亜弓にしてもあんまり意地悪にしないとか。

美内：そうですね、キャラクターの人間性みたいなものに、読者の影響は私自身をとれば、本質的にはないと思っています。自分の描きたいように描いています。あんまり読者の評判が悪くて、いつのまにか消滅させてしまったキャラはいます。その時は読者の気持ちもよくわかったので、そうしたんですが。あれっさりですね。話はわかりますが、ずいぶん前に、あるインタビュアーの方から『『ガラスの仮面』の好きなキャラクターと嫌いなキャラクター教えてください』って訊かれた時に「嫌いなキャラクターは一人もいません」って言ったんですよ。本当に嫌いなキャラクターだったら絵にも描けないんで、描いてる以上は悪役でも愛情を持ってるんですね。どっかにね。

#### 作中人物さまざま

小菅：わかりました。さて、今日のインタビューはアイドルについてということなので、田淵エミと青木麗と乙部のりえのこともぜひ伺わせて下さい。

美内：ええ、ぜひぜひ。乙部のりえは、とことん悪役なんですけど、結構人気のあるキャラクターで、本当に印象が強かったらしくて、未だに色んな乙部のりえについての質問があったりしますね。今回、舞台の方でも乙部のりえが出てくるんですけど、役者さんが面白がってですね、マンガと同じようなポーズをとったりするんです。亜弓と『カーミラ』で対決して敗北した後、乙部のりえは膝をついて白目をむく場面が漫画にはあるんですが、役者さんが同じように白目をむいているんです。そこに天井の照明があたって白目がピカーっと(笑)。乙部のりえはダークアイドルかもしれませんね。

小菅：私はあの場面読んだ時に、先ほど申しましたように、ある意味、北島マヤに対して姫川亜弓が当初は敵対的な人物として出てきたわけですね。その敵対的な人物の中から悪い部分が乙部のりえとして落ちたように感じました。そういう意味で乙部のりえは前半部分までの姫川亜弓の一部分のような印象を受けましたね。

美内：そうですね、それは面白いですね。亜弓がマヤの仇を取ろうとする中で、前半部にあった悪い部分が落ちていって印象でしたか。深い見方ですね。ただ二人のマヤに対する立場はまったく違うので、そういう風に考えたことはなかったですね。亜弓はマヤをライバルと認めているし、気持ちのどこかでその才能を畏れている。乙部のりえは成功のためにマヤの立場を奪いとろうとしている。たしかにここで亜弓の正義感というか、マヤに対するライバル以上の何

かが生まれたことはたしかですね。

小菅：そうか、そうになるとやっぱり乙部のりえと姫川亜弓は最初から違う存在ですね。

美内：そうですね。

小菅：先生、田淵エミはいかがですか。あまり出てきませんけれども（笑）。

美内：田淵エミですか?! えらくまたマイナーな。

小菅：北島マヤの最初の映画出演の時に、田淵エミがアイドルで、そのサポート役として出るわけですけど。

美内：そうですね、田淵エミに興味ありますか?

小菅：あれ、そうですね（笑）。

美内：作品が長期にわたるので、たくさんキャラクターも出てくるし、その中で気になるキャラクターとか好きなキャラクターを仰る方も多いんですけど、その名前が出たのは初めてですね（笑）。紫織さんが出てきたのも初めてで、びっくり（笑）。

小菅：私は、田淵エミが最後にインタビューを受けて、今度出演するときにはちゃんと演技の勉強をしてから出演したいと真顔で答える場面が印象に残っています。確実に北島マヤの影響ですよ。あそこに感動しました。

美内：そうですね、ありがとうございます。それはそれは…。

小菅：どなたかモデルがいたのでしょうか?

美内：モデルは何もいなくて、こんな子、いるかもなっていう感じだったんです。

小菅：劇団「つきかげ」の中に青木麗がでできますよね。宝塚的なアイドルですよ。やっぱり青木麗さんのファンっていうのも多いですか?

美内：多いですよ。最近はお番が少ないのでそれほどでもないですけど、ずっと出てた時は青木麗のファン結構多かったですね。やっぱり宝塚調の、男装の麗人っていうか、受けるんですね、そういうキャラクター。とにかく彼女が出



てくと周りが美しさを認めるという、そういうのに読者は快感を覚えたのかな。またマヤにとっての保護者的な役割で、お姉ちゃんが嫌なこといっぱいあると思うのに、プープー言いながら面倒みてしまう、そんなところが結構受けてみたいですね。他にも読者の方からあのキャラクターはどうなったとか、過去を教えてくださいとか色々あったので、もう何年もサボってるんですけど、ホームページ作るとき架空のインタビューコーナーを設けたんです。各キャラクターに来た色んな質問に、キャラクターたちが答えるというコーナーです。マヤや月影千草や亜弓や速水真澄、青木麗や、もちろん乙部のりえもファンからの質問に答えています。ファンの方が面白がって、色々な質問を書いてくるんですよ。一番びっくりしたのは、『女海賊ビアンカ』の台本を書かされることになった吉沢君への質問があって、「あの後どうしていますか？」って（笑）。「ゲーム業界で成功してます」って答えています。

小菅：そうですか、よかった（笑）。

### 挿入作品について

小菅：アイドル♡ヒロイン論を離れて、『ガラスの仮面』の中には色々な演劇作品が挿入されていますよね。どれも魅力的ですが、先生が特に思い入れ深く描いた挿入作品ってありますか。

美内：『女海賊ビアンカ』と『ふたりの王女』ですね。あれはもう完全に連載するつもりで、随分前からストーリーも構成もキャラクターも全部描いてストーリーをストックしてあったんですよ。それが『ガラスの仮面』が手間取って、結局、作中劇として使うことになりました。マヤにやらせる一人芝居は何かいいかなって考えた時に、これが浮かんだんです。大勢の登場人物が必要な芝居なんだけど、それを一人でやるという無理難題を自分に吹っかけて、考えたらこれしかなかった。で、しかたなく『女海賊ビアンカ』に決めたんですが、作中劇としてあんまり詳しく描いてしまうとマンガの連載が描けなくなる。後半はちょっと端折ったんですよ、話をすべて見せてしまわないようにと。ところが、これを舞台にしたいという人たちから問い合わせが来るようになったんです。個人の方もいらっしゃいますが、高校の演劇部とかがけっこう多いですね。どうやってやるか分からないけどまあどうぞって。台本だけ見せてくださいって言ったら結構それなりに空白の部分埋めるようなことで、色々な台本が来て面白かったです。2007年の7月から50日間あまり、世田谷文学館で『ガラスの仮面』展をやったんですけど、その時の学芸員の人がノリがよくてですね、世田谷文学館の一階のホールが使えるから、そこで劇中劇やっちゃいましょう！という話になって、二人でじゃあ『女海賊ビアンカ』やるかって盛り上がり、本当にやったんですよ。一人芝居ではなかったんですが。結構好評で。それで2013年の秋に、これを普通にミュージカルにしようという話になった。この時に以前宝塚で演出をやっていた児玉明子さんが脚本と演出を引き受

けてくれて、結局、今まで伏せていた話を全部出すことになって（笑）。でもこれがすごく好評だったんです。今また再演する動きがありますが、あ～あ、『女海賊ビアンカ』、これで連載一本ファイになったな…と（笑）。2020年のオリンピックのために取り壊しが決まっている渋谷の青山劇場で、昨年の夏『ガラスの仮面』の舞台がありました。マヤ役に貫地谷しほりさん、亜弓役にマイコさん、月影千草に元宝塚トップの一路真輝さんという豪華で素敵なキャスト。この中で『ふたりの王女』のクライマックスの一部をちょっとだけ取り上げて舞台劇としてやっているんですが、えらいものですよ、クライマックスだけなのに結構ぐっときて、私もですが泣いてる観客もあちこちにいる…。やっぱり演出家さんと役者さんの力でしょ、アルデイス役の貫地谷さんがすごくいいし、マイコさんもオリゲルドになりきってやりましたので、緊迫感のあるいい舞台になってました。それこそ劇中劇なので、『ふたりの王女』の最後のクライマックスしかやっていないのに、芝居を一本観たような充実感があって。あ～あ、これでまた連載が1本ファイになった…（笑）。また漫画の中で演劇界幻の名作として登場する芝居『紅天女』は、新作能として梅若玄祥さんが演じて下さっています。お能になったのは初めてなので興味深く観ています。

## 映画と舞台

小菅：手塚治虫もそうですし、池田理代子もそうですけれど、演劇とマンガってものの親近性ですよ。そういう面ではマンガっていう存在が演劇の方に近いのかあるいは映画に近いのか、小説に近いのかってことは時々考えるんです。手塚治虫を考える時に、演劇への関心ってものがマンガ家の先生方には多いような印象を受けますがいかがでしょうか？

美内：そうですね、演劇が好きな方もたくさんおられますが、今のストーリー漫画の表現は手塚先生が映画の手法を取り入れたものなので、やっぱり映画の影響の方が大きいと思います。もちろん舞台から触発されて作品に影響を受ける漫画家さんも多いとは思いますが。

小菅：ああ、そうですか。

美内：漫画って、映画を一本撮るのと同じような感じですね、感覚として。カメラワークとかね。演劇の場合はカメラワークないですよ。マンガの場合はここでアップに、このシーンで表情を見せるとか、このシーンはロングで引くとか、そういう画面構成はやっぱり映画から来てるものなんですよ。だから映画の影響というのは多いんじゃないですか…。『ガラスの仮面』を舞台化する時に、演出のG2さんも苦労していたようです。このシーンはマンガならやれる、でも舞台ではアップにならないからできない！って言って、削ったシーンが多いと聞いています。『忘れられた荒野』の狼少女ジェーンもそうでした。主人公の狼の表情を見せるとか、舞台では無理ですもんね。漫画を舞台化するときは、

そこを考慮して舞台としてどう面白く見せるかってことを考えながらやらないと難しいなと思います。マヤが泥饅頭を食べるシーンでは、舞台ならではの面白い見せ方を工夫しているところが面白かったです。

小菅：先生はよく映画はご覧になる方ですか。

美内：最近はおっぱらDVDを借りてきて観ることが多いですね。でも宮崎駿監督作品と『アナと雪の女王』は劇場ですね。あ、『永遠の0』も映画館か。映画から受ける影響は私はやはり大きいですね。でも舞台って一期一会じゃないですか。やり直しのきかない真剣勝負だし。そこにいい意味での緊張感と魅力を感じますね。なんといっても生の人間が一生懸命そこで何かを表現しようと生きている。そこがいいですね。

小菅：舞台のジャンルで言えば、歌舞伎とか能とか新劇とか宝塚とかミュージカルとか、特にお好きなものはありますか。

美内：最近はやっぱミュージカルが好きだなあ、って感じです。物語と歌とダンス。やっぱ観ていてワクワク楽しいですね。このあいだ舞台制作のある方から、日本はミュージカル大国だと聞きました。一番はニューヨーク。ブロードウェイですね。二番目がロンドンで、三番目が東京だっていうんですよ。だけどミュージカル三番目の大国の日本でヒットしてるミュージカルは、ほとんどが外国製で、ブロードウェイやロンドンで作られたものがほとんど。日本で独自のミュージカルを作って海外に出したいってその方が言っていて、ああ、その通りだなと思ってね。日本の中に素晴らしい音楽家もたくさんいるし、一流の舞台人もたくさんいる。日本製のミュージカルがたくさん海外に行く時代になるといいなあ、なんて思います。

小菅：『ガラスの仮面』を拝読して、あの中で、物語の求心力になるのは『紅天女』という作品ですね。あれはお能になりましたが、ただ原作の中では、ちょっと私の中では判断がつきかねていて、新劇ではないし、新派っぽいし。

美内：型にはめなくていいんじゃないですか。漫画の中での『紅天女』はまだ始まっていませんし。舞台で一番大事なのは“感動”ですし。

小菅：作品を読んだときに、月影千草であの作品を封印したっていうくんだり、木下順二先生が『夕鶴』を山本安英で封印したことを思い出しました。

美内：まさにその通りです。もともと『紅天女』は『夕鶴』がモデルなんですよ。脚本家の木下順二さんが、山本安英さんにしかやらせなかった、っていうのは有名な話ですよ。『紅天女』の話は『夕鶴』のように、もっと単純なもの

にするつもりだったんですけど、やってるうちに世相がどんどん変わってきて。自然環境であるとか、原発であるとか、日本は地震多いですからね。いつ国の土台がひっくり返るかわからない。人類の文明自体も一つ大きな岐路に来ているような気がして、いつの間にか『紅天女』のテーマ自体が深くなっていったんです。千年の梅の樹の精にして大地の女神。これをいったいどう演じさせればいいんだ、って、今、あーでもない、こーでもないってやっています。

小菅：私自身はシェイクスピアが専門ですが、先生がシェイクスピア作品では、『夏の夜の夢』だけお使いでいらっしゃいますよね。あれはどうして『夏の夜の夢』を？

美内：もともとシェイクスピアを『ガラスの仮面』の中でやるとしたら2作品くらいにしておこう、というのは始めからありました。あまり何作もやると『ガラスの仮面』＝シェイクスピア劇みたいな印象になりかねないし、主人公マヤのイメージにあう役柄があること、子供の読者にも分かり易いものを、ということを考えていました。近くに井の頭公園があって、次は何やろうかなって考えているときに、ちょうど野外音楽堂の前まで来て、あ、ここで『真夏の夜の夢』やらせたら面白いな、と思ったのがきっかけです。マヤが仲間たちと一緒にやるのに一番いいし、明るく楽しい。あれ楽しいじゃないですか、芝居自体ね。舞台上演はちょうど夏の連載の頃になるし、一度劇場じゃないところでやらせたいというのもありました。だから夏の野外劇場でやるにはもってこいの演目だったんです。劇団「つきかげ」と「一角獣」で組んだらどんな風になるかなと色々考えたら結構ワクワク楽しかったので、やることにしました。

小菅：そうすると、北島マヤはバックでしょうね。

美内：ですね、当然バックですね。

小菅：バックも妖精で、その意味では紅天女と繋がってくるようなことはありますか。そういうことは意識されましたか？

美内：その時はなにも。バックはいたずらな妖精で、まだ表現しやすいんですけども、紅天女は難しいですね。主人公の阿古夜は千年の梅の樹の精霊の化身なんですけど、語ってること、感じてることは女神なんですよ。それも日本の古い神道系、縄文神道みたいな感じです。でも、そこに仏師、仏を彫る人、が出てきて日本の女神を仏として彫ることで、神と仏が融合し、天女になっていく。だから精霊とか妖精とはちょっと違う存在ではあります。精霊ではなく、むしろ日本の「神」の存在として登場させようと思っています。ひとが山とか川とか海とか自然の中に神性を見出し、その中で生かされていることに感謝と敬いの心をもっていった縄文時代時代の頃の女神のような存在にしようかなと思っ

てるんです。

小菅：慶應義塾大学から名誉博士号を授与された著名な能楽師に坂井音重先生がいらっしやいます。東日本大震災のすぐ後でしたけれども、坂井先生に、新入生歓迎行事で『羽衣』を演じていただいたことがあります。その時、坂井先生は「『羽衣』は環境問題である」という風におっしゃったことがありました。美内先生は以前、NHKで『羽衣』が中継された時に、解説として出演されたことがあります。それを見て、『紅天女』の一つの材源は『羽衣』かなと私は思ったんです。

美内：『羽衣』を環境問題ととらえるのはすごいですね。

小菅：先生の作品の中では、先ほどの『女海賊ビアンカ』、『ふたりの王女』、『奇跡の人』、それに、『夏の夜の夢』もそうですが、稽古のところの描写が非常に多く描きこまれていますよね。最近は、月影先生のところでマヤと亜弓が二人がワークショップみたいにして稽古もやっています。そうだとすれば、先生のご関心として、もちろん出来上がった人物像よりもそれを作っていく過程を楽しんでいるところはありますか？

美内：もちろん、けっこう、これ楽しいんですよ、稽古のシーンとかオーディションとか。初期の「はい/いいえ/ありがとう/すみません」もそうだったんですけど、『奇跡の人』のヘレンをつかむときの稽古とか、狼少女の動きとか、想像してるともうホントに面白い。ずいぶん昔ですけど20代前半の頃に、主人公が雪山の中で遭難しかけるシーンを描いたことがあったんです。描いてたのは真夏だったんですけど、描いてるうちに本当に体が冷たくなってきて。そのとき旅館に缶詰になってたんですが(笑)。とにかくもう全身が凍えて、しびれてくる。冷たさで指が動かなくなってくるっていうのを体験したんですよ。真夏に。東京の旅館で(笑)。想像力ってすごいですね。雪もめったに降らない大阪育ちだったんですが、経験したことのない凍えるような感覚も感じられる。漫画を描きながらこまでくるのはめったにないですが、こういうところって役者さんも同じじゃないかな。演技って想像力の産物ですよ。これは人間だけに与えられている特権みたいな気がしますね。マンガ家も役者も想像したものを表現していくってことでは同じだし、想像を形あるものにする事で創造になる。

## 再びアイドルについて

小菅：本当にそうですね。最初に戻りますと、アイドルというものを考える時に先生が今言われたイマジネーションとしての想像力と、クリエイションとしての創造力。こういうものの一つの結晶がアイドルっていう風に言えないこともないかもしれませんが。ただそのあり方が違うのかもしれない。

美内：アイドルの究極は「初音ミク」でしょうね（笑）。大勢の人が寄って来かって想像力を使って創りあげたアイドルですから。自分たちが意識の上で、想像したものが具現化されてそこにある、求めているものがそこにあるって感じでしょうか。ただバーチャルなので、これは生身の人間より、アイドルとしての寿命は短い気がします。

小菅：そうすると、作り上げたアイドルもいつかは忘れられていくというか、落ちていく退き方もあるのでしょうか？

美内：生身のアイドルは人間として、成長したり変化したりと自ら変わっていきますが、バーチャルアイドルは流行が早いというか飽きられやすいような気がします。

小菅：なるほど。一方永遠のアイドルっていうこともありますね。アイドルのイメージだけが伝説化していくみたいな。原節子さんみたいな。

美内：原節子さんはそのイメージを壊したくなくて、年を取る前に女優を辞めちゃったんですよね、年をとれば容姿も衰えてくるし、そんな姿をスクリーンに晒したくなかった。みんなの夢を壊したくないって。あれもまた潔いですよ。観客が抱いていた“偶像”をそのままにして映画界を退いたんですよね。女優として別の道もあったのに、そうはしなかった。マリリン・モンローなんかもそうですね。あの若さで自殺なのか他殺なのかわからない死に方をしたので、永遠のアイドルになってしまった。美しいイメージだけが残っている。アイドルの条件って、こんなところにあるのかな。

小菅：なるほど、マリリン・モンローよりはずっと遡りますが、先生はクレオパトラなどはどうお考えですか。

美内：クレオパトラですか。あのエジプトの女王もアイドルの仲間に入るんですか？クレオパトラというと美人の代名詞みたいになってますよね。永遠の美人の象徴という存在だとは思いますが、アイドルというのとはちょっと違うかも…。話はズレますが、だいぶ前に美輪明宏さんの舞台を観ていて、なんとなくクレオパトラのイメージが重なったことがあって、楽屋でご本人に『クレオパトラ』を演じられたらいかがですか、って言ったことがあるんですが、あとで別の方から、美輪さんの前世はクレオパトラだ、って聞いてビックリしたことがあります。ご本人、知ってるのかな？この話。

小菅：そうなのですか！（笑）。

美内：天草四郎の前世までは知っていたんですが、私にはオーラの泉も見えま

せんし、なにしろ前世の話しなのでよく分かりませんが、美輪さんならピツタリくる感じですよ（笑）。

考えてみればあの方くらいスケールの大きなアイドルはいないんじゃないですか？

10代でデビューした頃的美貌は、誰もが見とれたでしょうし、銀巴里で活躍した時代は錚々たる名士が彼のファンとして集まり、今また若い女性や中高年のご婦人たちが引き寄せられるようにして集まって、美輪さんを人生の指南役として仰いでいらっしゃる。紅白で美輪さんが歌うときは視聴率が跳ね上がる、とも聞いています。その時代ごとに、うまく波に乗って存在し続けるアイドルですよ。カリスマ性も申し分なし。『愛の讃歌』『黒蜥蜴』『双頭の鷲』『卒塔婆小町』等々、美輪さんの舞台は色々観ましたが、気が付くと私、美輪さんしか観ていない。他の役者は記憶にないんです。こんなカリスマアイドル、そうはいません。天草四郎もキリシタンたちのアイドルだったと考えれば、世紀をまたいだアイドルかも（笑）。

小菅：そうですね（笑）。もう亡くなりましたが、前に日本演劇学会会長の河竹登志夫先生が『日本のシェイクスピア』っていう本の中で、日本ではクレオパトラの舞台がいいものがないと書いておられました。

美内：ああー、そういえばないですね、確かに。

小菅：これは結局日本人の一つの理想像としてクレオパトラが歴史上いかなかったからじゃないかっていう意味のことを仰ってます。人間として非常に自立し、また女王という権力者でもありという女性です。

美内：もし居るとしたらかなり古代の方になるでしょうね。卑弥呼とか神功皇后とか、描きようによっては持統天皇も面白いかもしれません。ようは芝居や演劇などで表現できるような伝説を残してこなかっただけかもしれません。

### 『紅天女』について

小菅：クレオパトラのことを出しましたのは、北島マヤっていう存在が、一方に恋があって一方に演劇という仕事があって。その板挟みにはなってはいませんが、ただその二つが彼女にとっては大きな存在で、それぞれが北島マヤにとってどういう風に展開していくのかなあなんて読者としては大変楽しみにしています。先生のインタビューを読みますと、他にも描きたいものがいっぱいあるのでもっと早く終わらせるつもりだったっていうことですが。

美内：結末までちゃんと考えているのに、20年近く前からラストは決まってるし、ラストの画面構成も決まってるし、最後にどういう台詞を入れるかとか、トーンをこんな風に貼るとか全部決まってるのに、何で行き着かないんだろうっ

て（笑）。

小菅：そうですか、今はそこにいたる過程なのですね。

美内：『ガラスの仮面』が早く終わるかどうかは『紅天女』の演技しだいかも知れません。

小菅：今の話を聞いて、今日は北島マヤとか姫川亜弓を中心にお話しを伺いましたが、本当の意味での偶像的アイドルっていうのは紅天女かもしれないですね。

美内：ああ、そうですね。そのとおりだと思います。

小菅：そうですよね、最初からずっとそうですね。

美内：はい。『紅天女』あつての『ガラスの仮面』です。

小菅：前に美内先生に人間教育講座でお話いただいた時に、慶應義塾大学メディアセンター（図書館）にぜひ『ガラスの仮面』を入れるべきだ、これはもう名著だからっていう風に言ったんです。今はマンガも入れてるんですよ。でも、大学図書館の方が、申し訳ないけどそれは出来ませんと。なぜかと言うと、完結しないと入れられないという当館の購書方針があるんですっていうのです（笑）。「分かった、それは今度お目にかかった時に先生によくお願いしておきます」と言っておきました（笑）。先生これから楽しみにしています。

美内：うわっ、すごいプレッシャー（笑）。

小菅：私の希望としては鷹宮紫織さんが幸せになるといいなと（笑）。

美内：私は根が優しい人なので、まあ、期待しておいてください（笑）。

小菅：今日は長時間にわたってありがとうございました。

美内：こちらこそありがとうございました。

（2014年8月19日午後、吉祥寺のホテルロビーにて）